第4回「若手研究者育成会」の記録

大学史事務室　佃　　隆一郎

2009年度としては最初の開催となる、第4回「若手研究者育成会」が4月21日（火）の午後0時過ぎより、これまでと同じ大学記念館2階の「越知研究室」奥の会議室で行なわれた。参加者は藤田記念センター長および、越知・今泉両客員研究員に、武井・暁の両ポストドクター、高木・広中の両リサーチアシスタント、記念センターと大学史の事務室から小林・豊田・佃の各氏、研究支援課から田邉課長、山本主幹の計12名であった（藤田センター長は講義のため途中から参加し、田邉課長と広中氏は所用のため途中退室）。同月の人事異動で研究支援課長に着任したばかりの田邉氏にとっては初めての同会参加となることから、同氏の挨拶も行なわれた。また今回から、事前の連絡や会場での司会進行は豊田氏が務めることになった。

今回は、前月下旬に1週間アメリカ合衆国シカゴ市での「アジア学会」の展示活動に出張してきた各氏（計8名中、本育成会での該当者は藤田センター長以下6名）による「シカゴからの帰国報告」の第1回目として、藤田・武井・高木の3氏がそれぞれ現地での体験談を報告した。以下報告順に内容を記せば、武井氏は所期の目的であった「東亜同文書院と愛知大学の存在を参加者に知らしめること」ができたかという点について、各出版社や書店による展示の場で大学の宣伝をすることには違和感を持ったものの、通りかかった学会参加者に声をかけることに努めたことで、知らしめる“きっかけ”になったのではと述べた上で、シカゴ大学院生の協力が大きかったことや、「世界は広い」ことを再認識するとともに中国語や英語を学びつづけることの重要さを感じたことを伝えた。続いて高木氏は自らの専攻分野と関連づけて、シカゴという街の空間的なイメージを実感できたことや、新旧ビルが混在した街並みや「建築の実験場」としての形成過程に日本の都市とは違った顔が見えたということを述べ、さらに食事のボリュームの大きさや会場・街中とも「人種のるつぼ」といえるものがあったことは、自分が感じた「アメリカらしさ」とした。

会場で用意された食事をとった後、藤田センター長が最後に、アジア学会での出版社・書店の集結ぶりや飾り付けの洗練さは日本の学会では見られないものとして、情報戦略上大いに参考になったとする一方で、学問の面でのアメリカの優秀さの基盤はここにあるのではとの所感を述べた。そして、日本人研究者の参加が少なく見受けられたことは、日本人による情報発信が今後の課題であることを教えていたのではとの見解も示した（これらの考えに対して、今泉研究員が「研究支援課の課題では」との意見を述べた）。

次回の第5回同育成会は5月19日に、今回の報告者以外のシカゴ出張参加者である山口・暁・佃の3氏によって、「シカゴからの帰国報告（第2回）」を行なうことを確認して、午後1時前に終了、解散した。